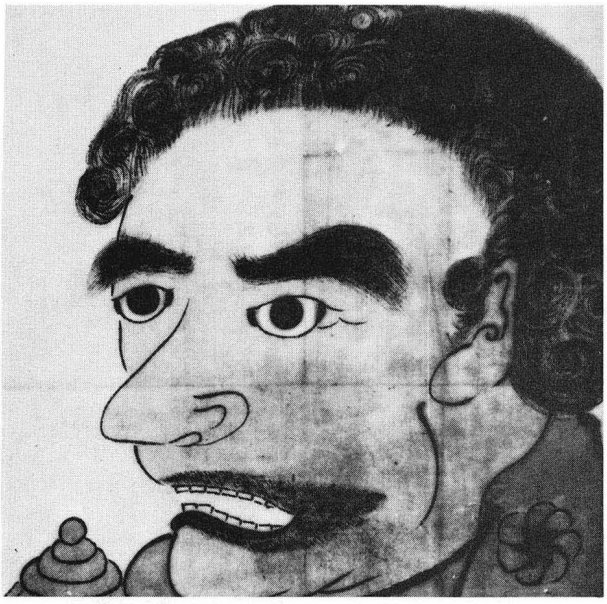
開港のひろば

NEWS YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY

●編集・発行／横浜開港資料館
横浜市中区日本大通3　〒231
電話　045(201)2100　企画室
●発　行　日／昭和59年8月1日
●印　　刷／㈲三信印刷所



「黒船来航絵巻」に収録されているペリーの肖像（肉筆、彩色）

収蔵資料の紹介

ペリー来航と絵巻物

嘉永六年（一八五三）と翌年の二度にわたるペリーの来航によって日本の開国はなった。これを契機に、日本は大きく転換していった。このいきさつを描いたもののひとつに、黒船絵巻の存在が知られる。当館では、二本所蔵しているが、以下に紹介する。

「着船の図」（全長622cm×幅27cm・彩色）

この絵巻物は、嘉永七年（一八五四）九月、横山時矩なる人物が、菅沼氏が所持していた（もしくは描いた）絵巻物を一時借用して写したものである。

絵巻物の構成は、①詞書　②黒船　③同上　④「ヘルーリ」「アワタムス」と隊員　⑤隊員の所持品（武器・楽器）　⑥久里浜応接場　⑦ペリーと隊員の上陸行進　⑧親書受取場面　⑨本牧・神奈川宿・西浦賀等の警備　⑩隊員の衣装と所持品　⑪アダムス親子の肖像、から成っている。この絵巻物のなかで気づいた点をあげると、⑦図中に、ペリーの横に寄り添うように描かれている洋装の日本人「長谷部」なる人物がみえること、（写真2参照）、また、⑧図中、警備を担当した彦根藩の井伊氏を「伊井」と誤記していること、更に、⑩図中の説明書きに「この図は佐々木氏の画いたものを写した」と述べていることなどである。長谷部氏が何者なのか、この他の絵巻物との対比、更に関係文献、資料とのつき合わせが必要である。また、後者は横山・菅沼氏の人物を考える手掛りのひとつになるだろう。

写真 2

「黒船来航絵巻」（全長673.5cm×幅27cm）

この絵巻物は、前掲の物と違って、絵のひとつひとつが本来独立して存在したものであり、偶然にして一本の巻物に収められたというにすぎない。その意味から、冒頭で説明した黒船絵巻の範疇外のものである。このように、作成の動機がさまざまであり、したがって用途も違ったため、巻物中の絵は彩色を施されたり、墨書のみであったり、また絵に精粗がある。このため、「着船の図」にみる華美さは望むべくもない。また、ストーリーが予定されてなかったものであるだけに、順序を追って事態の進展をながめる楽しさに欠ける。しかし、一点一点がペリー来航に伴なって作成されたものだけに臨場感にあふれ、かつ、歴史的資料としても価値が高い。

さて、その構成内容を紹介すると、①某藩調練　②黒船の江戸湾進入　③黒船の浦賀来航　④相模湾内の見取図　⑤伊豆大島地図　⑥某海岸新田開発見取図　⑦黒船の江戸湾進入明細図　⑧江戸湾内新規台場築立明細図　⑨久里浜応接図　⑩黒船　⑪久里浜応接図　⑫「ヘルリ」肖像（肉筆彩色・写真1参照）　⑬「北亜墨利加蒸気船ノ図」　⑭「水戸様御工夫」の水戦車（？）（写真3参照）、以上である。

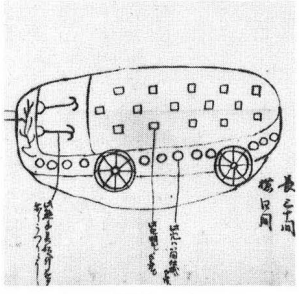


写真 3

最後に、近日中に、この二本の絵巻物は展示室に出陳される予定である　（阿）

館長対談

友野宏弥氏 山口辰男氏をゲストに

今回は、古い横浜の町や衣食住など市民の風俗について、横浜生れで、しかも偶然元街小学校の同級生でいらした友野宏弥氏と山口辰男氏をお招きして、お話しを伺うことにしました。

館長　この開港資料館でも、今後横浜市民の生活の歴史を展示でとりあげてみたいと思っております。生活史といいますと、ことの始めのときのことは割合文献に載るんですが、その頃の一般市民の衣食住がどうであったのか、あるいは、先端的な文明開化の雰囲気を市民がどれだけ取り入れていたかということは、文献史料に残りにくいので、年輩の方がたの御経験を聞く以外に方法がないと思います。

そこで、今日は古い横浜の町や風俗について、特に震災による変り目を代表するようなことをお伺いしたいと思います。まず、お二人の子供の時期、お父様はどんな御職業についておられたんですか。

山口　私は明治三十七年生れですから、明治四十三年頃から記憶に残っています。石川仲町七丁目の牛坂の下で生れ、父はその頃、昔の居留地九十番にあった輸入品を扱うシーベル・ヘグナー商会の番頭をしていました。帰りに人力車に乗ってくるとか、弁当屋の若い者が父の弁当を取りに来たりしてましたから、かなりぜいたくな生活だったと思います。

祖父は天保四年（一八三三）生れで、越前の農家の三男坊だったんですが、一匹狼のところがあったらしく、ひと旗挙げようと横浜へ出て、本町通りで生糸の露店商をやったりしたのち大谷嘉兵衛商店に勤め、父は番頭か手代としてあとを継いだようです。

友野　私の父は、明治十三年頃祖父に連れられて横浜に出て来たようです。祖父は徳川慶喜に従って、駿府へ行き、お菓子処の親方だったんですが、祖母の養子に入ってから、駿府で洋式の製糸工場を始めたところつぶれてしまい、横浜へ出て来ました。初めは老松町に住んで、父はクラインという宣教師について英語を勉強し、明治二十四年に明治学院を卒業したあとは、宣教師の通訳などをやりながら、私が生れたときはY・Uクラブ（ヨコハマ・ユナイテッド・クラブ―外国人の社交クラブ）のマネジャーをしていました。母は会津の出で、フェリスを卒業後、速記とタイプを勉強し、英文速記の草分けでしたが、セール・フレーザー商会で速記を、その後スタンダード石油でマネージャーの秘書をしてましたが、元町から人力車通いでした。

館長　小学校時代の同級生の様子はどうでしたでしょうか。私は、大正三年東京の生れですが、小学校四年のときにクラスの中の男の子が一人、洋服を着ていたという有様でしたが。

遠山館長

友野　その時分、靴下などは日本製はなくて、境町（現在の日本大通りの日本銀行から横浜公園に向かう辺り）に近栄、近文といった洋品店があって、そこからしか買えなかったんです。私は大正三年に洋服を着て行くと、同級生がゾロゾロ家へついて来るんですよ。

山口　小学校のとき、和服で初めて皮のランドセルを背負って行ったんですね。そうしたら皆にたたかれてしまって、一日で上の皮がメチャクチャになってしまった。

館長　いつから洋服を着ましたか。

山口　僕は中学に入ってからです。

友野　家でおやつにビスケをくれると、それを子供にやるものだから、友野の家へ行くとおやつをくれるから行こうといって皆来るんです。

山口　その頃、母の兄が長者町で化粧品を造って売っていたんですが、僕はその香水を造る仕事を手伝っていましたので、匂いが体につくんですね。それで学校へ行くと皆にくさいくさいと言われる。こいつは女の子とばかり遊んでいると。

館長　家で西洋料理を食べたことはありますか。

山口　父は弁当で食べていたかも知れませんが、僕は食べさせられたことはないですね。

友野　中村町に住んでいた時分でも、クリスマスになると七面鳥を買って来てよく食べていました。大きな石炭だきのストーブがあって、その下の天火で七面鳥をローストターキーとして食べました。

館長　お父さんが家で晩酌をするとき、ビールとかワインはやっていましたか。

山口　父はワインを飲んでいましたね。

友野　ドイツのミュンヘン・ビアというのを飲んでいたのを覚えています。また、父はクラブ・ホテルにいた関係で、ぶどう酒の古いのをよくねかしてありました。

館長　ビールとかワインを家庭で飲むというのはめずらしかったんでしょうね。

友野　少なかったでしょう。やはり商館関係の人たちでしょうね。洋品と同じように食物も、元町の何軒か馬車道の神保とか明治屋へ行かなければなかった

館長　家庭で牛乳を飲むということはどうだったですか。また、朝食は和食でしたか。

山口　僕は牛乳で育てられました。根岸から鷺山、柏葉にかけて牧場がいくつもありましてね。うちは六角牧場というところから、熱いのを朝配達してもらってました。西洋料理は、いつも父のおともで食べていました。

友野　牛乳は、明治の初め頃から配達していたようですね。車をひいて。朝食は、大体パンにたまごでした。コーヒーは、子供には飲ませてもらえませんでしたね。豆挽きはよくさせられましたが。うちは母が仕事に出てましたから、お手伝いさんが訓練されてまして、西洋料理を家でひと通りやるんですよ。西洋野菜も植えてました。山下町に栗山という洋食堂があって、非常においしかったのは、ホテルのシェフと同等の連中がつくっていたらしい。それがコックさんとして、近所の御婦人を集めて講習してくれたりして、お手伝いさんなんかもそれで勉強したんでしょうね。

山口　大正になると市内電車が本牧まで行くようになって、元町の河岸にはビールを積むためのホームができたりして、トラック電車というのが出入りしていたね。

館長　山口さんの本（横浜三街物語―モトマチ・いせざき・西口」有隣堂・昭和五十七年十二月）にも出てきますが、ここで中学時代の盛り場のお話しを少し伺いたいのですが。花屋敷（注）というのは……。

友野　あれは楽しかったですよ。本牧の一角にあって遊園地を大きくしたようなもので、植木が専門で、菊人形ですとか、ゴリラやヒヒ、象やトラもいたし、メリーゴーランドがあって、活動写真をやったり。夏になると花屋敷海水浴場というのを作って、水泳を教えてました。日曜、祭日だけでなく常時やってましたね。

館長　中華街の料理はいかがでしたか。御家族とよく行かれましたか。

友野　おいしかったし、私たちはよく出かけました。専門学校ぐらいになると仲間同志で出かけるんですが、最初に点心が出ます。悪い奴らは、まんじゅうの中のあんこを食べてしまって出して置いておく。すると店の人も心得たもので、勘定のときにまんじゅうを調べに来た。学生は悪いことをするということが知られていたんですね。

山口　あの時分東京で見られないものは、横浜港の観艦式とチャブ屋、それに中華街でしたね。

館長　伊勢佐木町はどうでしたか。

山口　浅草六区みたいなもので、僕ら小学校五～六年の頃にオデヨンができました。日本での洋画の封切館でしたから、東京からも出かけて来るファンが多かった。ステージの手前にオーケストラ・ボックスがあって、幕あいに有名な曲を生演奏してくれたから、映画ファンだけでなく音楽ファンも吸収してましたね。

山口辰男氏

友野　あと、角力（すもう）常設館というのがありまして、普段は映画館なんですが、両国の本場所が終ると三日間位横浜へ来て相撲をやるんです。これは伊勢佐木町ではないんですが、音楽といえば大正期に、開港記念会館で、当時世界一流の楽師が来て演奏会をやっていました。ハイフェッツとかクライスラー、日本人ではコロラチュラ・ソプラノの関屋敏子ですとか。これの後援をしていたのが、日の出町にあった西川楽器店です。オルガンやピアノを造ってました。

また、競馬場では年二回位ですが、御賞典のときに有栖川宮様とか伏見宮様とか名代宮様が来るんです。すると近衛騎兵の儀仗兵がついて、立派な馬車に乗って横浜ステーションから地蔵坂を登って競馬場へ行くのを見に行くのが楽しみでしたね。そのときは、各国の大使が人力車で、シルクハットをちゃんとかぶって燕尾服を着て行列について行ったりして。

山口　競馬場へ行くのはゴルフのボールを拾うのが楽しみでね。

大正期というのはわれわれの青春期で、非常に楽しい時代で、われわれの世代というのは、見方によっては一番幸せな世代だったかも知れないですね。

館長　話しは変りますが、関東大震災のときのようすで覚えていらっしゃることをお伺いしたいのですが。

友野　本牧は新開地で、原さんが地所を安く貸したものだから、勤め人の上級の人たちが家を建てたんです。私の家は一階が八畳、六、八、六、八、上が八、六畳で二千円位でできました。本牧はほとんどつぶれてしまいましたが、私の家は二階が下に落ちただけで助かりました。あとは近所全部、二階の屋根が地面の上でした。

山口　数えの二十歳でしたね。僕のところもつぶれたけど焼けませんでした。それから二～三日経つと、焼けた死骸が海岸に流れ着くんですね。すると漁師たちは困るものだから、みんな棒で突ついてしまう。くっつかないように。

友野　今の西口が海で、小さな島があったんですが、そこに重油タンクが二つあって、それが壊れて火がついて流れたものだから、夕方から、港から油と一緒に重油が燃えながら川へ入ってきてしまったんですね。それで元町の川は橋が落ちて、四日目位には水ぶくれでふくらんだ死体が真黒な油の中にいっぱいでした。ひどかったですね。

山口　正金銀行の塀の中にも二百人位焼け死んでました。

館長　よく書物などでは、震災によってオールド・ヨコハマは消え失せたといわれるんですが、実感として、震災の前と後とでは市民の生活はどうでしたか。

山口　今になって思えば、やはりもう少し残しておきたかったと感じますが、その時代、私たちは青春の真只中でしたから、町が新しくなっていくのが何か嬉しいといった気持ちでしたね。

友野　私はまた別の角度から、横浜市の発展という点からみると、震災のとき非常に損をしてると思います。というのは、横浜は開港によって他所から来た人が多くて土地の人が少いんです。市会議員でもほとんどが他所から来た人で、区画整理をやらなかった。道路の拡張や下水の整備をやらなかった。それで遅れてしまったんですね。また、そのときの失敗を戦災後にと思ったんだが、進駐軍が来てダメになってしまった。

友野宏弥氏

山口　いろいろ考えてみると、横浜というのは開港の初めから列島の幹線から外れているということなんですね。汽車が初めて通った頃まではまだよかったけど、日清戦争前後から東海道線が真直ぐ行ってしまい、横浜は袋小路になってしまいました。

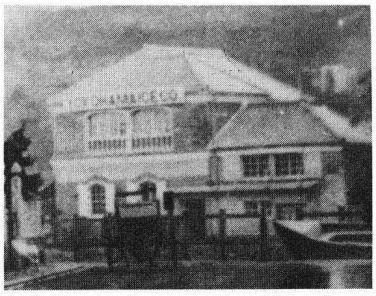
館長　お二人は、ともに外国関係の職業を持つ富裕な御家庭に育ったので、早い時期から家庭内に西洋文化が取り入れられておられました。一般市民の生活としては例外的であったといえるのでしょうが、それだけに「ハマッ子」の生活の一面を代表する面白いお話しを伺うことができたと思います。本日はどうもありがとうございました。

（去る六月十三日の対談です。）

（注）平塚福太郎が、明治末年頃本牧町に設置した遊園地。四季を通して珍種異類の花を観覧に供したほか、演芸場、動物園、水族館などもあった。また、児童クラブを組織して小学生を会員に種々の催しを行うなど、児童教育の一助をなし、当時横浜一の遊園地として栄えたが、数年で廃止された。

資料よもやまばなし

一枚の写真から―明治初期・横浜の氷事情―



写真①

谷戸坂の登り口に「神奈川日冷」という古びた製氷工場がある。歴史癖のあるものには興味のひかれる建物である。震災後の建物だが、その前身は明治十二年オランダ人ストルネブリンクによって創設された日本最古の機械製氷工場であるという。位置は山手町一八四番地、旧山手居留地一八四番にあたる。

ところで横浜居留地で発行されていた新聞 The Far East の明治三年十二月十六日号には、初代ゲーテ座の写真が貼付されており、その右よりの建物にYOKOHAMA ICE CO. の文字が読みとれる(写真①)。これがストルネブリンクの製氷工場であると思われがちなのだが、よく考えるとおかしい。明治十二年に創設された工場の写真が、明治三年の新聞に登場するわけがない。それに山手居留地一八四番には、明治三年当時、イギリス軍の兵たん部売店があったはずで、写真①の建物は本町通りの突きあたり、堀川をへだててやや左手にあるから、その隣りの元町一丁目十一番地にあたる。隣りといっても居留地の内と外の違いがある。

それではこの建物は一体なんなのだろうか。この疑問に導かれつつ、日本人側の資料としては「中川嘉兵衛伝」と新聞、外国人側の資料としては居留地で発行されていた英字新聞や外国人人名録(Directory)を渉猟しながら、明治初期の横浜の氷事情を探索してみたのがこの小文である。

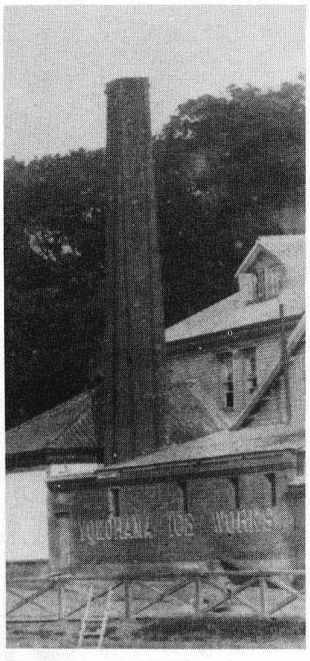
天然氷の採取・販売事業は、十九世紀初頭アメリカのニューイングランド地方に始まり、ボストンから各地に出荷されるようになった。開港直後の横浜にも早速ボストン氷が輸入された、と中川嘉兵衛は言っている。「ジャパン・ガゼット横浜開港五十年史」によれば、最初に輸入したのはクラークという人で、そのため「氷のクラーク」の異名をとったという。これに刺激され、また食料保存や治療のための氷の効用について、アメリカ人医師ヘボン、シモンズの教えを受けた中川嘉兵衛が、国産の天然氷採取に乗りだしたのは、本格的には元治元年(一八六四)末からであった。失敗を重ねたのち、明治二年に函館氷を出荷する。Directory をみると当時居留地四二番に Burgess & Burdick という食料品商があり、隣りの四三番にはその所有になる氷室(Ice House)があって、Wm. L. Clark という人が管理していた。あるいは先の「氷のクラーク」と同一人物であろうか。外商に負けたのでは「商民ノ一分相立ガタク」「御国体ニモ関係仕」という意気込みで、嘉兵衛が値下げ競争をしながら猛烈な商戦をいどんだ相手の「四十二番ばうしす」あるいは「ほるでつき」というのはこの商社のことであろう。The Far East 明治三年七月一日号に、「函館氷の登場で、どんなに貧しい人でも氷を手に入れることができるようになった」という記事があり、この間の様子を彷彿とさせる。この商戦は明治三年末嘉兵衛が函館五陵廓の堀で良質の氷を発見し、出荷するようになった翌四年には、函館氷の勝利が決定的となり、結着をみる。嘉兵衛の記録には「外氷コレガ為ニ廃亡シ社ヲ引テ本国ニ去ル」とあるが、確かに Burgess & Co. は明治八年中に姿を消している。かくして氷は、舶来品に打ち勝った国産品の第一号となったのである。

Directory によるとこれとは別に、明治四年以降十二年まで、一五八番に The Ice Company of Yokohama という会社があった。東京日日新聞明治八年九月七日号にみえる「横浜西ノ橋際の外国人氷室」がこれにあたると思われるが、この新聞によると、嘉兵衛の採取した函館氷をここで貯蔵し、それが東京に運ばれてくるという。ちなみに経営者の T. L. Brower はシモンズのもとで薬剤師をしていた人なので、嘉兵衛とも面識があったかもしれない。

写真①の建物が誰のものだったか、ここで結論を出してみよう。これは、嘉兵衛が明治元年、「元町一丁目」に「極入念ニ造立」したという「横浜氷会社」の氷室に他ならないのではないか。嘉兵衛は明治四年には東京に進出し、七年頃には函館に住所を移しているので、横浜での氷の貯蔵・販売は Brower の The Ice Company of Yokohama に委託するようになったのであろう。この建物はその頃にはもうなくなっていたかもしれない。

さて、隣の山手居留地一八四番に製氷所ができるのは、イギリス軍の撤退後、明治十二年である。最初は Japan Ice Company 十五年から Yokohama Ice Works となる(写真②)。通説とは少し違って、ストルネブリンクが経営に加わるのは十四年から、十六年に単独経営となるようである。明治後期の記録では、六名の外国人と十二名の日本人が働いていた。(ここから独立した人に、不老町の製氷問屋田中弥平がいる)。明治四十五年帝国冷蔵に譲渡され、日本人の経営に移った。ストルネブリンクはその後も横浜に住み、大正六年九月十七日、七十才で死去、妻ハナとともに山手外人墓地に眠っている。

(斉)



写真②

横浜人物小誌 ④

陶山篤太郎

●ある詩人・政治家の横顔●

御存知の方はそう多くないかも知れない。いや、知らぬはお前だけ、との御叱咤が聞こえる気もする。実を申せば、私が初めて知ったのは、ついぞここ四、五年前のこと。鶴見の佐久間亮一氏が快く当館に寄贈された同家資料の中の、先々代権蔵氏の当用日記中に彼の名が散見し、以来、私の心にかかっていた人物なのである。

ここでは、権蔵日記を通し、陶山篤太郎の生涯を点描してみたい。彼は、明治二十八年（一八九五）旧川崎宿の旧家足袋商青木屋、陶山家の長男に生れた。父の姉、篤太郎の伯母が鶴見の旧家佐久間権蔵に嫁いでいたこともあり、九歳の時生見尾小学校に転校、以後大正三年（一九一四）十九歳までの青年時代を佐久間家で送る。明治四十二年小学校を卒業、市立横浜商業学校（Y校）に進んだ。在学中は、「学業ノ成蹟（績）優秀ナラサルニ運動ニフケ」る毎日。栄あるボート部に所属していたが、三年生のとき、競艇で右手指を挫傷、中指の傷は生涯残った。それでも、大正三年には無事Y校を卒業したが、運動に熱をあげたせいか、成績は卒業生七十七人中七十三番であったという。権蔵の斡旋で、めでたく横浜商品倉庫に就職したものの、欠勤や無断外泊、監督者としての権蔵の眼には、学生時代以来の不品行は一向に直らず、苦言を呈されても反省の色なく、為に七月には実家へ戻された。後年の豪放磊落の姿を彷彿させる。折角就職した商品倉庫も保証人の権蔵に断りなく辞め、父子で東京の日本珈琲株式会社に再就職。権蔵は、「真ニ怨シ難キ愚物」と記す。翌月、千葉県国府台の陸軍野戦砲兵第十六連隊第一中隊に入営、上等兵に進み六年九月末に除隊した。篤太郎は、書店開業を企てるも挫折、ついで品川の活版業好文舎に出資（権蔵の融資）して共同経営に奔走、外泊、家族との不和など無頼の日々が続く。七年頃から佐藤惣之助らと交り、詩作活動を始めていたが、周囲の眼には「篤太郎ハ即今壮士俳優ノ郡（群）ニ入リ浅草辺ニウロツキヲル」と写った。結局、自宅の三光商店も十年十月に倒産。詩作活動は深まるばかり、十三年に詩集『銅牌』を処女出版、世に問うた。

大正十五年、佐久間権蔵は県議補選で県政界に進出、篤太郎はその選挙運動を担った。昭和二年には夜間労働学校の講師、次第に政治の世界に翻身する。三年の普選第一回県議選では、権蔵は民政党、篤太郎は社民党から立候補。立場を異にしつつ、十年間も寝食を寄せた伯父であり、傾いた陶山家の家計を援助してきた伯父である。親密な関係は続いた。篤太郎は、その後日本国家社会党、愛国政治同盟、大日本青年党へと転じ、十三年七月から一年余県会副議長を勤めたが、咽喉結核に冒され、十六年九月逝去した。享年四十六歳、波乱万丈の若き生涯であった。

なお、竹内多三郎氏は『文化かわさき』に篤太郎の評伝を連載中である。同氏から多くの御教示を得た。記して感謝したい。（佐）

ひとこと

文献の欠巻について

この間、『大阪市史』を閲覧しようとしたところ、どうしたわけか全部が揃っていない。幸い私が当面必要としたのは史料編であったから、用が足りたが、本編が欠けている。『大阪市史』といえば、わが国における地方史中の白眉で、その編集から七十余年を経た今日でも、依然、その古典的価値を保っている。現在、復刻版も出ているのだから、至急全巻を揃えてもらいたい。『大阪市史』のほかにも同様に欠巻があるものがあれば補充してほしい。また、未整理の文献も相当あるやにもれ聞いているが、これも早急に整理をすまし、閲覧できるような措置をとってほしいと思う。

海外資料目録の整備

私が横浜市史の編集に従事していたころ、広瀬靖子さんに依頼して、F・O・文書の相当くわしい目録を作成してもらったことがあった。一八七八年から八一年まで四年間の分ができただけで、それ以後のものは予算がきれ、いまもって手がつけられていない。こうした仕事も、本館で何とか継続するわけにはいかないものであろうか。F・O・文書ばかりでなく、マイクロ・フィルム化されている日本関係の外国資料が多いことも、本館の重要な特徴の一つである。これらの目録が整備されれば、本館は、わが国における外国資料閲覧者のメッカともなろう。

資料館の体制

現在、私が痛感することは、まず館員の充実とその質的強化ということである。落ちついて資料の整理と研究に従事してもらうためには、博物館の学芸員に匹敵する専門職（アーキヴィスト）をおくことが望ましい。また将来にわたって資料館の総合的運営を企画するためには、館長の諮問機関としての運営委員会の設置が必要であろう。それから本館設立の準備段階で問題になっていた閲覧・展示部門の本館への統一化も、早急に何とか考慮してもらいたいものである。

（津田塾大学教授　石井　孝）
元横浜開港資料館設立研究委員

コープランド生誕百五十年記念
『ビールと文明開化の横浜』展（8/1～10/30）

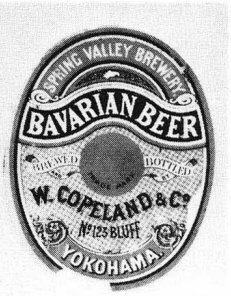
今回の展示は、横浜ものの始めの一つとして、文明開化期の横浜でビール醸造を始めたウィリアム・コープランドの人物像と彼の果した役割、開港に前後して流入した西洋の食生活、ビールの誕生とその周辺、舶来ビールから日本人による日本人のビールへと変遷した道程など、ビールの世界を紹介するものです。

展示は、大きく分けて(1)開港と洋食文化の始まり、(2)ウィリアム・コープランドとビール、(3)ビールの普及と明治の人びと、(4)ビール産業発祥の地―横浜、の四つから構成されています。

「開港と洋食文化の始まり」では、主に居留地に入ってきた洋食文化や食生活のようすを、横浜絵や地図を使って紹介します。「ウィリアム・コープランドとビール」では、生れ故郷であるノルウェーの風景、日本人・勝俣ウメとの結婚関係資料、横浜で始めた醸造所関係の資料、直筆の手紙などを通して彼の人物像を浮彫りにするとともに、わが国のビール産業に与えた彼の役割を明らかにします。

また、「ビールの普及と明治の人びと」では、当時の人びとが、どのような場でビールを飲んだのかを風俗画報や写真で見るほか、森鷗外など有名人所用のグラスを展示する予定です。そして、最後の「ビール産業発祥の地―横浜」では、ビール産業に占める横浜の役割を改めて考えてみようというものです。

この展示を見て、洋食文化とともにもたらされたビールが、どのように日本人に受け入れられていったか、また、お雇い以外の居留外国人が、わが国文化の発展に果した役割の一端を知っていただければ幸いです。



行事開催予定

▼展示　『W・コープランド生誕百五十年記念・ビールと文明開化の横浜』展（8／1～10／30）『外国商館と横浜』展（11／2～1／30）『ジョセフ・ヒコと海外新聞』展（2／2～4／24）

▼展示開催記念講演会　9／29（土）13時30分～16時30分当館講堂　小木新造（上越教育大学教授）「相沢日記にみる庶民の食生活」、村岡實（日本風俗史学会会員）「ホテルと西洋料理」先着百名、250円

▼講座　(1)こども歴史講座小学生コース（小5～6年）8／28～31、10時30分～12時　中学生コース（中1～3年）8／28～31、14時～15時30分　(2)横浜市史講座前期＝横浜人物誌講座＝8／11・25「島田三郎と横浜市民」遠山茂樹（横浜開港資料館館長）、9／8・22「浅野総一郎と京浜工業地帯」服部一馬（横浜市大名誉教授）いずれも13時30分～15時当館講堂で一講座だけでも受講可　(3)同後期＝港都比較講座＝10月～2月予定　(4)古文書を読む会＝市内地方文書に親しむ＝開催中5／5～2／2の土曜日全18回13時30分～15時・講師内田四方蔵（郷土史家）(5)資料講読会＝オールコックの「大君の都」を読む＝開催中5／19～2／16の土曜日全10回15時～16時30分・講師石井孝（津田塾大教授）

詳細は、（二〇一）二一〇〇内三〇までお問い合わせください。

行事開催結果（四月～七月）

▼展示　『開港期・横浜の町と村』展（4／25～7／29）

▼特別講演会　6／2（土）13時30分～16時30分教育文化ホール永六輔（放送タレント）「誰かとどこかで」　色川大吉（東京経済大教授）「近代文化と横浜」477名

▼展示開催記念講演会　5／27（日）13時30分～16時30分講堂　西垣晴次（群馬大教授）「関口日記にみる幕末」、林英夫（立教大教授）「開港期・庶民の生活」62名

▼講座　横浜市史講座前期5／12・26「パークスと横浜居留地」高梨健吉（慶大教授）6／16・30「渡辺福三郎と横浜商人」高村直助（東大助教授）7／14・28「ワーグマンと黎明期の日本洋画史」酒井忠康（県立近代美術館学芸員）

ミニ情報

1 寄贈・寄託資料（四月～七月）

(1)汽船運航運賃表等（今井紹雄氏）
(2)「ベラ・アルウィンの生涯」（金井うた氏・山本博氏）
(3)プルーム・コレクション日本関係洋書等（ロバート・グリーン氏）
(4)絵はがき等（ニール・ペドラー氏）

2 出版物

(1)「吉村屋幸兵衛関係書簡」第1集　B5判　89頁　123点
(2)「横浜開港資料館要覧」B5判　32頁

編集後記

開港資料館も開館以来三年が経過した。この間、内容の充実、市民へのPRを課題に活動を行ってきた。入館者も漸増している。だが、今回「ひとこと」欄で石井先生御指摘のように不備な点もまだまだ多い。地道にかつ堅実に、一つ一つ越えていくところから信頼は生れる。将来に向って資料館は、今、新たな歩みをはじめようとしている。（小）